御諸家覆小路 下

特別
5
6710
2

ベ5
6710
2

春

元方に向かへ多味噌やすき流
ふるに男去の始乃御歌こそ　似春
世継の物語やうなりけるとも　不卜
物りくやらし玉をふるとも
天の原まてうとむ袖舞
吾子て砧臺の蓋も明の去　仙風
もしゆらう高さ日いろく三象

〈2015-112〉

掛こひ志川うゑ毋ゆかの表　吟夕

まつえよりそとむらんて立春

代くもりがつ大ゆゑ　酉水

風流ゆ格　借とも表ハさて

ちハかうゝの雅子のゆたく　不卜

ゆゑ月春とゝふ発ゆの場

摩擦川　春うゝひとゝの声　兼豊

志い奴哺よりし表春

中てちハさい　怯なくゆう　似春

花時ゝ川高棒焼ゆ

昌瑠（不言の立ゝ　胡蝶　似春

竹鶯の竹ゑもむ弦物言

陽毛をまく孔者乃　時ゝ　調和

共孔ゝや　蛇柳とゝ

楊貴妃の楊ハ表り孔れて　幽山

見とゆくゝの無ゆ表

毛多ゆみうゝ尾先うゝて　同

誰うゝちゝいゆれよ私

ぬとそ夢にたに見ぬ相と新の宗　露言

撫ひの角綱さめうの角ハ

古下法の柳ハ善薩と別れて　言水

茶ハ海めうの多ハ小刀を咲て

柳ハ楊枝　濃　金の　里　二葉子

関の明　秋　天秋の長

三味線とやり流ゆ多　泰德

柳小木うとを　鶴の水と

とろ汁ゆ花の　水宝紅　卜尺

ほろ山よ　矣う　あいは

藝風長やゆ花のあらやとて　卜尺

よう法ゆ人形の毛を

肥中のうそ　見ゆ　の山　如丹

松明乃ゆ胸よ

白昊や長ゆ命と神の泉　調泉子

殘雪　玉杯　春の野風

四拳の数よ入いく　帰雁

三吉　の林とうて賣　調吟

花ゝ不君うゑ方へしかく色ゝ　智風

七面の心うゝをゝゝゝゝゝ

春の風ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　動ゝゝ　泰德

夏

夕涼風ゝ懷さゝすゝの

耳うゝを遊し初郭ゝゝ　調和

山林竹木枝乃村立

夕月待鳥を穂よ雪へゝゝす　泰德

夕雨くゝの声ゝくゝ山

黒燒のむうゝとなゝゝ付　愚猴

油乃のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

郭公いづのまにやうきがらす　智鳳
庭ハ千枝にうゑ色ぬれ打
大長押むしハたがと紙ぬ　調和
雲の峯白ぬりかゝん
夕日合羽沢瀉色に白ぬやう　調吟
松原通り子代のうゑ
引ぬ長菊絵ゑく白ぬうて　幽山
大源屋の鯛も丈に安売宮
切ぬ田子者浦舟　桃青

虫の鉢白髮とうえ成に名れ
瓜乃中この寶盞　この首　桃青
古用于ゝ長乃思ひ
瓜乃ゆ拍子ゝくとわりんて　幽山
見返やゆきのあるも月結
芝居ゆおかゝく輝のね衣　調吟
かゝ砧よすゝ素乃紙
生絹清服ゆゝ形人と　仙風
行水ゆて勅使待ゆ

行く秋 肌い冬梨の梨ぬし　泰德

秋

大和歌の歌書大至の歌

夫ちと武いさきちる虫鳴て　兼豊

うちハ日東人の情し秋ぬ秀

如多拾遺集をとく倉乃萩　調和

をとゝひのうつ〻ゝ長き夜すゝ

ぬれとさいうるゝ鳴そきりゝす　幽山

むし衣石の秋乃秋ぬ雪

長嘯の音こゝろよく帰　秋青

孝の為彼沂のほとりに　露言

庵に似てしづかなる岩葺の宿

親より孝あれば親は人也

悲哀憂よりも楊梅の美味　吟市

つゆぐさに年古に命帰山也

電光朝露玉央流星　一松

帰かり秋に書る聖夏

夕影よ角乃ちえらる酒ひさて　卜尺

鶯ちゝ〜ちゝを〜〜　侍

新茶表とうけしの宣を節ゝて　仙風

美酒よ央うちの猶あくるの

蕎の細屋　法師の頭　寸夕

うぐひす半ば乃衣笠の塠

校大夫の鶏とうるゝて切て　萩風

法大名御射西亦の月丸雲

ゆしうゝ美よりの多〜

一円さゝもと茂やさゝ乃　智鳳

蓋拾るゝ花に恋ひ
盗人と一すぢ栗生寒
夜に秋嶺の谷せゝと すゝ　流也
小性ゝ婆ゝそゝしの月　巖泉
裏付の菜畑乃玉出そめくを　岚雪
俳句は哀の影秋いまて
さゝら三八代文字のうゝかゝ　心色
茅屋相母かゝ夏聖寒
鶏むさゝと松むしのゝ　露蛍

ちゝ〳〵〳〵宋村萩
俳優に寒ち乳を夕涼　愚假
三盃機嫌　寒そみゝ
熱てゝと いとゝ浦の萩声　露丹
秋彩や瘧も蔵る身の秋
山茶のつゝ　初鹿乃声　可躍
浦今のうゝ見えゝゝ松蛍
辛物かせゝ物乃多涼也　調泉子
よゝのすゝ見ゝ月

風の秋雲ハとまるつきと　露伴

ちみの切萩は綿よ起こそて

ふれて男廉の角ハ香箱　加夕

弁慶ハ物弁と訂よする月

亀井片思　徳　涉るまわ　卜夏

孔子ハ鯉奥のそこにわれ

東記する養吉ハ恒月更て　桃青

流紅芝居うつる嬬也

萩落さわ刈　萱ちやく　同

脱かしの萩の上風

ふれ付思くそして　松出ハ　露言

あてういかるう家ちむ

風いそ秋とくんの湯元会　同

家ハちそハ巻れな

のうちくそもも山の名源　同

亀ほつこうハたなりれ山

見渡ち枝の秋ハ胡桃見　寸夕

新文を見ち幾伝の雲

白粥に俵藤太乃君の月　仙風
下げいるに帰されし板窓
秋くれし雅楽のけしき哉　幽山
雲のせいらいやさとせう
六茄莚ひくち椎茸かさねて　同
鎌倉山とこゆる勅使
あざてかもちいられぬハ虫の夢　同
以後禅丹ある笠の月かつくと
月の門黄に鷹さしれし炊　同

冬ざれと門ハ荻乃葉枯れし
秋の夕松ハのこしてもみぢ哉　同
霧のまりそ角屋久しき
露なくて拾石一川山と見なせて　調和
冬まれ松むしなきてせりさ
菊薄袖のかうろひ裾乃語　同
中将乃さしぬハ後の婦くろめ
さゞみなちるなれ夕　歎の霜　兼豊
おもひの夕珊瑚珠の杖紅紫て

伽羅の足袋より麻ちる時 蝶子

紫舟 一首乃弁天の衣ぬぎ 岳秀 不卜

冬

ぬきちらしたる夏ゐくの山 幽山

ちる時ハいつまでの山や 付句さん

夕の勇書院床ちるもしらんて

炉乃炭うしら紅葉をれたるや 同

よい炭の命 源山色の香

茶哈 伏 法といんとこゝろの

ちきり化れる首とうるる 調和

男廉病を見しと茶会　兼豊

法りをくく小男廉の声

ちるや梅雪名残の潮分て　露言

東南しをくと押を

火燵会て追ふかり　仙風

泊を雲母ふ須千鳥

うるかふる者の法をて　調泉子

いまを絶寿をて松の色

ほしの光宗紙ひらひらを　可躍

大飯を切寿おう歌八平氏

孫さの白梅紙を酒丹て　緑子

神祇

あれ松の森乃下乃
いとのゝかりなる手弁小菜畑　似春
ようさ　芝人なる新の畑の
とをわらゝ母ほ神のゝくて　同
かて付なゝの　伊勢乃神垣
木乃やゝ木の片ゝゝ　卜尺
大王のわゝいれ給ふ　朝朗

麻屋の主婦母　義の告ゝ　仙風
我ゝ乃松母服や立らん
弁ゝ逸しかゝ乃法ゝて　言水
遠ゝさしもの法の志ゝ波
いとの神さしゝ酒湯よ家ゝ乃　泰徳
和歌ゝ乃新合ゝ勢八子家
市稼の箱伊　勢　の三部　不卜
あゝさこなゝさ（死神乃意
比叡に法ゝれ給ふ婦の囊　不卜

澄上再詠園かりの
てんくや梅擬紙のみそさ川　不卜

釈教　付述懐　懐旧　無常

擬紙波や釈迦同道　実法の
所ふ行無通り自在と拂ふ　仙風

蒔絵丹ちる子舍利塔婆
秋の壱幸ひの絵陀佛と唱ふ　白豚

妻の形見乃ち盥紙
製造の紙脱ぬ床ふ入ふ　巖泉

ぢくい京元いちいっ祇しや

長芋絵後より破れ高矣にくるの　兼豊

大紅葉の永にとらし水餅

ちやうしの林檎の朝霧　杉風

紫苑の唐崎嵐ふるや秋

むし〻思ふ深小刀に瓜の多　調和

清人と橋示ようも丸にさて

温飩蕎麦切地蕗の素麺　二葉子

味噌袋瓦生よ慈悲と丸ゆ

伊豆国おとひの外の傾換　卜尺

うらと秋川く小法師とかな　蝶子

柳もも花の餅食の生者

菊母や酒樽醤油　末迎　桃青

淡樽丹大焦熱の者と乗

仁義善薩に樫をうせる　同

薪ゆり伝む　代八車

宮山の秋地と言無人納めます

秋植ちく見ゆ制　礼露言

出家走伊勢を作りお供ん　幽山

[illegible]
友に寺あり 壬生の忠峯 流也
案内 谷 [illegible] 一[illegible]
九歳の窓十帖 乃紙屋よし 心亀
佛乃[illegible] 廣小路 [illegible]
おのれて [illegible] 田楽 黄雲 嵐雪
乃三河岸 [illegible] 僧 [illegible]
龍の口より 羅を 乃こう [illegible] 雲夕
[illegible] 鱧 [illegible]

天敵の妻 昊 吾 [illegible] 卜円
[illegible] 山 [illegible]
[illegible] 一き上人 露夕
毎年の風 [illegible]
[illegible]十年 [illegible] 人間のうち留 交夕
[illegible]
[illegible] 調泉子
綿袋円丸 [illegible]
[illegible]寺 [illegible] 慈 [illegible] 聽雨

地獄の苦ともしらず十万盛
賞掛りこうの収丹付らして　卜吟
鳴くたちそ　郭公　撰
偏しやもいはしらの来るもの　兼豊
拍軍ゆうの立かん子　沈
浦鴻の竈を今ハむうまく　幽山
竹細工　心よりもれるもの
浮世の枯紙ようそに耳かく　露言
ゆる如来のおもとうそ

卜さうく見や未英のこう有　露夕
早捕の穴義一門見えにきわ
極楽さしてこうをしか陽子　杉風
砂糖箱蓋とあるを八宝丸書
菓子の袋と見る新西行　同
聖灵棚を屋貸ものう
仏法の影乃まてもなるて　同
和尚の灵見諸し糊売
せけうやの文戒の門ハぬらん　仙風

蓋義を六文字に定らま
解脱の門の通り横町　仙風
弘誓の母恵慈悲の内
抹香や涙の香も火と立ちぬる　不卜
釈迦如来涅槃の日嘉元
鳩のこうの丹、この乳白波　同
罪業を人世もちんうとき浪
圓海種合のまぶ口と行　同

悲

木枕と月見いる浦の波
山ある方丑かとまたこ　兼豊
二番目の庫い思ひの心底
紅葉ちるて胸ハ波羅むさ　調和
人の月おさ波蛸ちる月
庫淋し袋の寿自然石　同
文のようくらせ無常の色
つゆ秋ちるとも秋ちるとも　幽山

上ノ巻

比同のちさうあらを車なる
待女がうとを名とうぶと　一うん　幽山
又ある何いい勝とさうらく
逸丹そそ温石の黒い流ううと　似春
脱てんうういい伊勢の墨を
はつ見丹くおすさとるらし　同
佛をぬまにて多義帝
古るの秋中ぬ姫もうるつきて　同
あまりよくて悪稚の色

ちひさやあ者ゑつうさ丹杯のと　露言
業袋丹ようう野の心とせさ入て
志川部をなくく　袍(ホウ)帽(ボウ)の舞　卜尺
簾のうちうう生ちさ風
猫の瓜ねそ引たまふ清もうう　玄素
勝の学ううの玉章と猫
付うとつ戸丹くいとうさ毒　正定
是ままりせ多ゑ代の矢海
続買みやこう西と学えはう　一肖

袖にをれのひの仮せ給ふ

豆腐のふたつ〳〵別盛の香　愚僕

背中と名づく別盛也

仰の河内にきと泥ぬきて　真也

玄関の鳳　悪しきに新宅

移り住みをるとよせぬ人の月　調泉子

後百よ丸千三湾も集りて

鹿の刺身い比丘尼也名の　泰徳

中義の合をいうる松り茅

聖人をもかつて鼻の風　露耳

奇妙の二階城ゆゑと名てかり

鶯尾を尾より聖章湾　白勝

ゐる内者の室の新いたり

紫丹くあり河いあり山下風　卜由

彼女をかりひ柳ちり

別を病よおてさく以孟章

うつり癒百の前の方ゆゑ　流也

大鶯小鶯を来たり来る

智鳳

舞引出機ヶ浜のびと丑寅
方盤よりも海老乃回穴　寸夕
西にくの肌をもうる美華
彼文まくうる以小西　西　卜吟
美張よ円浦ゆよりの
れもひをこうす七夕の月　調泉子
胸よせうる蛾さ乃峯
変にやう云の原もなる神渕　露出
浦雲や床をもてお思ひ

ゆうつるやまいの病療うるうち　青雲
さ乃のあを変久い行うう
乃ふ高きなうれてやさ大洞　兼豊
美をいそこ　ひ乃一枚
うさ別者屋より岩多老す　春徳
天狗の音さ伊の美
拍子出人作うるい玉うう　不卜
松いつまなる美流は春也
ほうを露立音の平さ考にうう　同

就寿色同産生とのこ
風呂屋の湯番と仕へ給へ　不卜
妙喜山つゝ紀里の母あこが
れ乃山遠配を行くゝし　同

雜

蹴のゝ歌山陰丹して
中納言見ハ似あハぬ業乃位　巢豊
ゆくとも糸上中ゆくとも
光景ゆよハ　專　二郎　調和
町ゆこつくしのあゝぬ大母衣
あるむくや奚ゆ半巢長方　幽山
且ハ一人良を去りむゝ
乞祢の汁大同弐年に生られゝ　似春

[illegible]いろく書付多書
[illegible]かまんせいの[illegible]新[illegible]
被れ待て　蘿本の風　一松
[illegible]の作の[illegible]を出す　露言
腦柳のかつらさ[illegible]て
大文字の出る所　無名の流　桃青
切合人形　乳を[illegible]
無四条川原の花　大石　吟市
筋違丹の吹原　草の風

弦の年丹[illegible]四を見くらべ　露言
[illegible]の裏と見[illegible]新
[illegible]し[illegible]の[illegible]
水風呂桶の罷　葉の[illegible]　松柳
お背中へ洞の風を[illegible]立て　山夕
わるいあんちゃごまをすりかき
人お見[illegible]を[illegible]新小姓原　調和
[illegible]の[illegible]来[illegible]安房
[illegible]抜というさていい[illegible]　泰德

宮兵衛殿
やはこ豆腐の器ア六寸太　卜尺
海ハ七里の土用干なる
中平う濱鯉の宛義蓋ゆて　仙風
串さし魚子やきく
次事飯市ちうろくれてこゆる　緑子
すくミおそ釈迦堂
三川具足ちさちに云　白勝
あまのくまさるつかくを

夕雲ハ虎狼やくうんの栖と来　巖泉
さし紙ハ鬼の伝表ちつさにかう
名ことくそそ下ゆと六人　玄素
油あをなり君髪
そそそ孫のうしれそも孤ゆ　昨云
そそ人と言のつそ店貸
清水やそれハ大和ちよまかう　一山
千年愛の冬乃さし板
張組よ袖吹うくもわし山　露丹

[illegible]の風情 私の下枝
[illegible]の色をくゝみてかゝる 真也
[illegible]
行と袖と口りくにある事おうう 調泉子
第とくゝ[illegible]く河面陰り
[illegible]雲ぞ[illegible]い小兵にんゝ考の 調吟子
優阪の嶽ハ空に横たはて
日本寺一夏ゝ留士山 卜夏
[illegible]山ゝく[illegible]お宗知り

歩の色は[illegible]若 私ゆゑて 流也
動動の色の拾ひ[illegible]
[illegible]こ風いよゝ[illegible]ゝとかしら 智鳳
天[illegible]
[illegible]
いゝゝゝゝや 玉[illegible] 卜由
[illegible]丁子かゝら[illegible]
[illegible]色 酉水
[illegible]
[illegible]の綿[illegible]二[illegible] 宗真

かうとをふることをきくとそのこゝろ
こゝろ賞翁丹　ゆめうつゝ幾世ゆい　可青
ゆ後や伊勢の秋植さかゝ
三枝坊　いとゝ　ゆかしう　心色
富士と形　猶の波見せ先
箱入のかうさの歌迦の秋来迄　卜流
こゝろ悪ほよ員一夕家
草ゝ　お爺を文中初　卜円
後ゆ今ゝ　ゆまい居下也きう

腸風抑たまいぞ　長れ　童吉
氣色をゝ　ゆうゝさの秋
下度人崩の秋小秋文弓　調和
世に生れても人外の哭
ゆゝいの冷さいうかり松林　同
崩ゝゝむ秋ちゝ文拭
白物の糊　糊ゆやのうん　同
ゆ老去拭乃遠間者ゝ
氣絶の滴ゝ　わゝさ乃風　同

地震するかと大雨となる　兼豊
小田原の松い儀ハ枝をしなめ
うゝらの鶏ハ鳴れいとゝを　同
かよふつゝのをとゝ
ひくい事虎の妹乃こい元めこう　蝶子
ひゝ日ハ秋乃風を絶ぬ
胡蝶ひゝ中ハ泡さゝく　梅同
細の山ハ又　梅春　ゆゝ
ゝ花梅のかまくを責ゝ　同

雁の寄を集ゝ入めゝ
大ハ面白を京良れ川　桃青
武蔵ゝ門ゝてよゝく
歌ハ後と人ゝ鹿つき　同
鶏一川の袖の表とゝめゝ
れ人間ハぬゝ味噌の出　同
るの岩かゝ乃秋ゝ
夜綱ゝハ次ゝの蒲泡　同
ゝすゝと人きハかゝい柴来

中さしの帰る所をとゝんとて　桃青
うすかの声　脱丹平春と中尉
ゝや物とゝ世せゝ　ゝ新源会九山　同
あつゝゝ夫葉　泥水の末
世界と紀門ゝ　ゝうこゝゝ大形作　同
お場に立しーよざの濱泥
鉢陵ゝんゝゝ　ゝゝ海のゝうゝゝ名　同
上ハ腸指　中ハ行角ゝ
夜夜に紙ゝおざーの濯ゝて　同

ゝりゝゝ　ゝ形の蓋
ゝゝの腸ゝかゝ立ゝゝゝて移で　同
奥の腸　ゝまゝ海に泥皇
女院ゝれゝうまゝ二位の尼　鯛　同
大屋の逐ゝ　屋蔵ゝ家すゝ
味噌焼ゝゝ七日ゝ　稲荷山　同
下旱ゝゝ武士九行義西ゝ
掛鉢や三人　泥丹千五文　似春
ゝや三度ゝ　表ハゝゝゝ

四月の末の和田の大うみの風　似春

宗祇の一首風こそ有て

薩摩根御ぬしの家まで　同

火もやうして滝も溺ぬ

紅れの色料理の天上を　幽山

伽羅の歌おもふ蛇とな

傾城町や今浅茅原　同

畜生道丹とや引らん

猫婦をこの糸にを繋て　同

かゝるさ一本寺乃名残な

大佛の鼻乃下風ふりくて　同

上こさせられ乃名残ハ

年代記をうもしろ　同

後やゝ志乃の中わいるゝん　同

とこの世ハ花を称うなかまも

さるゝゝみてゝす蝙蝠のなれ　同

苔筋ゝゝ夢心を見わくる

人形の細ハ清見乃実なれや　同

新紙初め　山湾乃行
一帆に蓄ふの里を浦ちく　幽山
拂ひつらん引さきの紙
初ちまむとそなへぬ掃とそ嵐　同
系の月や　紙衣の岩
四料理の驚　三枚続れつら　露言
やいやこそ掃乃ちよ意へな
ふわるる紙　紙のかこひ　同
尾上よ通よ　俳諧の志

物凄風　貢之　衣の折くハ　同
林　春月　乃第氏丸刊
う旋さい法ち　蔵を作婦　同
扉のそ　主　去の村立
と胡乃主ハ　訳世　古史や物産　一松
世上の法ちハ　の　ち
尾紀とつ　く　蔵ちの　同
うこ　哭さう　氣色
わうう　ハ　庭　同

うすぬの心とゝいとゝの席　随所

地白の毛うゝハ紀寒ゆこゝれゝゝ

ゝゝひさゝてこゝて一ゝ虫の声

けんと立ゝゝゝ賢ハ武蔵坊　泰徳

天の和歌ゝゝ行ゝゝ　汁

食ゝゝく院よゝ度ゝゝゝゝ　同

疲のはゝゝゝ定家の卿

大酒ゝ閑ゝゝ王の色ゝゝ　同

疲ゝいさゝ立ゝて月華ゝ

燈ゝゝ点ゝゝ流ゝ　同

毋屋のすゝゝゝゝゝゝ恩愛

さゝ樞や枕よゝ立ゝゝゝゝゝゝ　同

千ゝ書ゝ原引ゝゝゝ幕

斉最六ゝゝゝゝ是ゝゝます　言水

恨ゝ菊のゝ楽ゝ恋ゝゝ

ゝ一ゝ侠ゝゝゝゝゝ　同

小引ゝゝゝ

浦潟ゝゝゝの鶴ゝゝく　同

引さ二ち紙にのこれる雪
後楊やうさ心丹を海て　言水
僊云くさの筑萩すさ
二尺三尺蓋のもとの人ちや坊　同
菱の実たるや神代博社
延齢丹喉丹なり新石清水　同
白雪の冬ハ豆腐よ陸ちう
里ハよし野の雪たまりし　同
よ狩五りしの漫歩やあれ

わま酒やまうれぬうれの泥海　杉風
道祖のやうな紙尺れて紙袋
百脂入り加うさのうう　卜尺
寺へまいうと留ち紙業す
ちうにくやふの塵ご綿なし　随所
物ふまに罰やうを仮面尺
情のよ足のよ生れ出こるい　卜尺
よ羽ひ子代石山に筆尺て
六十年乃表　こうへ　ちれ　同

わゝ笠と袖に笠ゝ　みてお
うゝてゝんよりやとゝ小ゝ引や　卜尺
胸と扣くゝ志賀の山風
柴垣や大津うちおろす浦ゝ　同
横雲の下　若菜摘や
吸ゝうゝ花火の野ゝ焼てゝな　同
みゝゝ殘ゝうゝまゝ足返ゝ
こゝゝこの十五夜　細ゝ川さけ　同
五間ゝ後ゝを責たゝすや

食粒のゝゝれこゝ小法氏ゝて　お　同
延喜の帝　羔なれゝゝ
序ゝ書ゝ十八日の火ゝるて　同
博奕やとゝうゝや私ゝ七浦泊
追退をゝうゝや吹上の浜　底　同
追ゝものゝゝゝゝ郷書　拵ゝ
ゝゝゝゝゝゝ秋形ゝゝゝ武君一湾　同
おのゝゝやらくゝい　ゝの紅ゝ
ゝゝゝゝゝ引のゝゝゝゝゝ　仙風

仙風

仏をりとハでかりしきり
賞吟母十六らくがん糖かう
古反古にをものこれるの系

同

中絶し氷えんやく二三年
足波とは波をとをし浪毫

同

藻に住海をとり脇大根

同

人乃反乃りける母腰貴

同

元亀に源金山やりすん

同

業よ模樣世ハ苔丹ゐ

玄素

草帝地仏より結ぶ唐一刀
風呂あり弘れ初神姿
苔母まりるる奥乃ゆるあり
千汁と澄の雪を添て
庚去の雪白ゑ了す白
こを実形地を横へ月風
まわ鏡地元初をゆ溪蓑
たくハ夢をたうゆハ乃
大蛸のいがとおをる冬鏡を

同

白藤

同

巌泉

今年や武州かんすもりぬん
世間の月毋月　吉次ちがい　巖泉
火事なしの所を流せべき地の
歌あるいなし　慈岩寺ぢ　寸夕
寅卯辰巳の松い久しき
刑ひの今先祭りてを祝せよ　同
今年分れど扇の京毋く
法ひたまへ源之伝より　同
三男う服ありいきのうい

文霊香泉平安来　つまに源り　同
書そむ法会山の秋に
貞永元年八月十日　同
いうさま見ハ旗本の風
政治地の鼠を見ず不義やか　同
感陽文丹かうをむき入
いつをやを狭の縄とそをまき　流也
天は山丹を秋色乃山
年双紙雲の海流吹ちよ　同

彼皇帝の居所をと
突掛り奏万八千あまりや　流也
とるくさめられ家一人
せ着れつ汁のつまいわまい　同
流むをはわ乃毋美代
突抜さすまるこまるの流　同
なんその附毋は宮乃村湯
さ書てを新とつりり新附日　調泉子
わるるり等嚴義をしや奏

こ意むり抜にまるしと沢紙毋　同
佐くま反名の沖てこ見先
夜ゆりきるるるの一滴ちわり　露夕
三日かるく篤れしる
天沢を抜れい就抜く多の海　同
小沢や示乃延毋月とうわ
石臼二川よ別るまるてやま　心亀
塵つるたを抜毋の流多て
をるの法乃海老乃胴うう　同

雁やちかんやさい雁や　心色

海士乃いさり火清水哉　智鳳

きく海さしある寺乃建立

沙料理に文この腦とりまつ　宗真

月とりてそこと引きてこまくよ

きつゝ乃おきて双六乃石

苔庭乃あるゝ先食乃えにまつ　爾水

見なれ杉木の梢乃ふるやう

山風乃風よなりゝや浪乃音

釣世乃流や去の袂乃見来　木水

又月雨に屋敷風や海うん

行くゝ色を芦供茶乃ゆき　春重

ふんとうみいるゝ見すゝ橋姫

里んとちりめんさやの中山　重良

月に見にいかの新来うれ年氏

蜻乃入乃ゝ　お接入　道　卜由

あといとゝ無の水上古文な

鶯のうゝ　かゝ乃見地　不卜

あふさまはしる扇の岩ぬくとい
新庭の庭のてんくとやく　不卜
雪ちよ恨の梅や砂ゆん
其代ハ乃車　あらそい　同
歌恋心菜つゝ水波薪こゝ
それこ国ぬかわるゝ　まゝ　同
関い漕よ雪わ会と答わ
恋と賞ゝ　伊勢丸大掾　同
盤久浪よ　あらいしあゝ

扇の国東丸にかゝれり　同

賀

恋悲き
君の代ハ蛇鞭を鞘ぬきまて　杉風

北八